

年の瀬に、地域の住民が集まりお餅をつく。小さな子供からお年寄りまでみんなで和気藹々とお餅について寒空の下で食べる。お餅をつくることで自然と住民同士のコミュニケーションが生まれ、新年を清々しい気持ちで迎えることができる。

さて、島でも十二月十四日にみやげじま風の家にて餅つき大会が行われた。この餅つき大会は、二〇〇五年から行わされており今年で九回目を迎える。みやげじま風の家現地事務教区長の坂上幸一郎さんにお話を伺ったところ、この餅つき大会は、二〇〇五年に全島避難から帰ってきた時、島民の方々のふれあいの場として風の家が生まれ、みんなで元気づけになるようなことができないかという話になつた時、餅つき大会の案が出て、開催に至ったそうだ。坂上さんは「最初に第一回交流会つて言つて、第一回つて付けたんだ」と語ってくれた。普段風の家

をつく。小さな子供からお年寄りまでみんなで和気藹々とお餅について寒空の下で食べる。お餅をつくることで自然と住民同士のコミュニケーションが生まれ、新年を清々しい気持ちで迎えることができる。

年の瀬に、みんなで



に足を運ばれている高齢者の方々のみではなく、餅つき大会には小さい子供や中学生など様々な年代の方が参加していた。この餅つき大会は様々な方がそれの立場で手伝つており、若い方はテントを設営したり、少し足の不自由な方も看板を塗つたり、看板に貼る花を作つたりと本当にみんなの手で作っている様子が伺えた。

十一時時過ぎから行われた大会は終始みんながリラックスムードで、お餅をつく時にみんなで「ヨイショー」と元気よく掛け声を出してお、お昼過ぎにはみんなでお餅や焼きそば、そして温かい豚汁を食べた。そして最後にはみんなで輪になつて、楽しかった時を噛み締めるように歌を歌つた。全てのプログラムが終了し、みんなで片付けを行つている時に参加者の方々から

ターゲットを開けたまま撮影することにより、光の軌道を写真に収めたものである。光量が多いと真っ白な写真になつてしまつたため、カーテンを閉め、電気も全て消して行なつた。

まずは、懐中電灯を子どもたち一人ひとりに配布する。ライト部にセロハンテープを貼り、そこをマジックで好きな色に塗れば、その色の光が映し出されるようになり、自分だけのオリジナルライトとなる。青、橙、緑、紫など、色とりどりの光が揃い、子どもたちは

2013年
(平成25年)
12月18日
水曜日
あしたばん編集部
発行所: 加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第四十六号

pika
pika

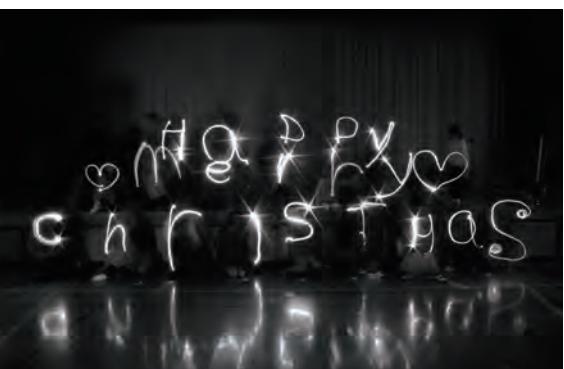
二〇一三年十二月十四日、三宅小学校の体育館に約二〇名の小学一年生が集い、PTA行事が行なわれた。縦横無尽に走り回る子どもたちの姿は、まさにエネルギーの塊である。その有り余るエネルギーを坂上さんに聞いてみたところ、「島民方々が非常に協力的なおかげで、特に苦労は無い。僕たちは環境を作るが島民の方々が主に活動していて、様々な方々が応援してくれているので非常にやりやすい。お餅をみんなでつくるのもそうだが、僕らの願いはこの大会を通じて島民の方同士友達になつてもらいたい。普段島で歩いている時等の何気ない時でも繋がりを継続していくほし」と胸の内を語つてくれた。

定された文字を描く。約二〇名が一斉に描き、ひとつメッシュページにするため、ひとりでもミスをしてしまえばもう一度全員でやり直しをしなければならない。呼吸を合わせて、一思いに描いていく。四回目の撮影にて、pikapikaは完成した。美しく、それでいてそれぞれの個性が活かされているような作品となつた。

十一時時過ぎから行われた大会は終始みんながリラックスムードで、お餅をつく時にみんなで「ヨイショー」と元気よく掛け声を出してお、お昼過ぎにはみんなでお餅や焼きそば、そして温かい豚汁を食べた。そして最後にはみんなで輪になつて、楽しかった時を噛み締めるように歌を歌つた。全てのプログラムが終了し、みんなで片付けを行つている時に参加者の方々からどう写るものなのかを理解してもらうために、簡単な練習を行なつた。飲み込みが早く、数回の練習ですぐにコツコツpikapikaが一体どういうものなのか、その文字が割り当てられている場所に移動してもらう。位置についたら、びきによつて自分の担当する文字を決め、その文字が割り当てられている場

その後、親子やグループ単位でpikapikaを撮影した。今度は形が定されていないため、子どもたちが考えて作成する。星やハートが人気だったが、中には身体を型どつたものやクリスマスツリーといった高度な作品に挑戦する子たちもいた。撮影した二枚のpikapikaを上下に配置して印刷をしたら、オリジナルクリスマスカードの完成。子どもたちに対する、少々早めのクリスマスプレゼントである。

与えられた五秒間の撮影時間で、指



(長富将成)

景色と風と



十二月十五日、三宅中高合同でマラソン大会が行われた。このマラソン大会は昔から行われており、全島避難以前は男子が島一周女子は半周走っていたが、現在は男子七キロ女子五キロを走るそうだ。

寒空の下、みんな元気いっぱいに走っており、中には半袖短パンで走る生徒もいた。生徒に声援を送っていた三宅高校の先生に話を伺つてみたところ、「是非良い記録を出して欲しいがそれよりも島の風景を覚えておいて欲しい。そして、この冷たい風の中走りきったという達成感を味わつてほしい」と話してくれた。

日曜日ということでもあってか生徒が走る道路沿いには多くの父兄が集まつて熱心に声援を送っていた。高校二年生の娘がいる保護者の一人に話を伺つたところ、「自分の娘が目の前を走ると興奮して娘よりも熱くなってしまふ。ほとんどの生徒を知つていて応援に力が入る」とのこと。実際に娘

が最後になる娘さんへのメッセージを伺つたところ、「順位よりも、島を感じながら走つてもらえば」と感慨深げに語ってくれた。

中学、高校と六年間続くマラソン大会、六年でおよそ島一周分走り終えた時には素晴らしい達成感が味わえるのだろう。

(長富将成)



さんが目の前を通つた時はハイタッチをするなど、非常に熱心な様子が伝わってきた。来年でマラソン大会が最後になる娘さんへのメッセージを伺つたところ、「順位よりも、島を感じながら走つてもらえば」と感じながら走つてもらえば」と感慨深げに語つてくれた。

中学、高校と六年間続くマラソン大会、六年でおよそ島一周分走り終えた時には素晴らしい達成感が味わえるのだろう。

マサちゃん

今回私たちが取材させていただいたのは古谷優(ふるやまさる)さん。名前の通り、優しくて黒い肌がよく似合う漁師さんである。

一日目の取材は三宅島高校の脇にある倉庫の中で行なつた。そのとき、優さんは漁で使用する網を編んでいた。煙草を吸いながら、見事な手さばきでどんどん網を編んでいく。優さんの真面目な表情に、私たちは緊張していた。

一つの網を編み終わつて、お互いに目を見ながら会話が始まる。正直それでは少し怖い印象を抱いていたのだが、優さんはとの会話は本当に楽しくて、あつという間に時間が過ぎてしまった。緊張によつて強ばつていた私たちの顔も、優さんとの会話によつてどんどん柔らかくなる。完全に優さんのペースに飲み込まれてしまふのだ。さつきの真剣な表情とは打つて変わつて、優さんはくしゃくしゃ笑う。その笑顔はとても魅力的で人を惹きつける。

取材を終えた日の夜、一本の電話がかかってきた。「明日坪田港に来れば、船の写真も撮らせてやれるぞ。あんなところじや、ポスターも作れないだろうから」。

翌日、坪田港で優さんの船、大洋丸を見させていただいた。優さんは漁だけでなく、ダイビングのお客さんと共に海へ行つたりもしていて、その日はダイビングの帰りだつた。ダイビング

のお客さんは優さんのことを「マサちゃん」と呼ぶ。彼らは一年に数回、千葉から訪れるそうだ。船から降りると、笑い合いながら記念撮影をして、その姿を見て、優さんは多くのひどに愛され、囲まれている漁師さんなんだと確信した。

千葉から訪れるそうだ。船から降りると、笑い合いながら記念撮影をして、その姿を見て、優さんは多くのひどに愛され、囲まれている漁師さんなんだと確信した。

(小笠まゆる)

冗談をたくさん言うような明るい優さんだが、「漁師みたいに苦労する仕事はないよ」とも語る。「青春なんてなかつたよ」と。それでも、そう語る優さんの話が聞けないと三宅島に来た気がしねえ、なんてことを言うお客様に、優さんの表情は柔らかい。その表情に、優さんの強さを感じた。

優さんの話が聞けないと三宅島に来た気がしねえ、なんてことを言うお客様に、優さんが会うために三宅島を訪れているが、三宅島を上から見たのははじめてだつた。船より値段は張つてしまふけれど、違つた三宅島の姿が楽しめるかもしれない。



島びより

ヘリコプター 小笠まゆる

朝四時半。車に布団を詰めてヘリポートへ向かい、私たちはヘリコプターの切符を手に入れた。

出発の約三〇分前になると、手荷物検査などを行なう。ここで見送りの方とはお別れだ。ロープで仕切るという簡素な区切りではあるが、この区切りが「別れ」を意識させる。

待合所から外を眺めていると、想像以上の速さでヘリが接近してきた。機体を後ろに傾けながら後輪、前輪の順に地面につけ、着陸。プロペラは回つたままだ。エンジンの轟音のなか、ヘリへ近付く。後ろを振り返ると、三宅島で出会つた家族が手を振つていた。

嬉しさを感じながらヘリへと乗り込む。ヘリは運転手席に二人、お客様は最大九人乗ることができる。携帯電話の電源を切つて、シートベルトを着用したらよいよ離陸だ。エンジン音が大きくなつて一気に上昇する。人、家、木々、まちがどんどん小さくなつていく。船からは見ることのできない景色が広がる。今まで数回この島を訪れているが、三宅島を上から見たのははじめてだつた。船より値段は張つてしまふけれど、違つた三宅島の姿が